

6-2 損傷の進行が緩やかな道路等（分類C、D）

（1）点検の方法

点検の方法は以下を基本とする。

① 点検計画の立案

道路の総延長を考慮し、更新時期や地域特性等に応じて道路管理者が適切に点検計画を策定する。点検計画では、各年次における点検路線（又はエリア）を設定するなど、対象路線をどのように網羅して点検していくかを計画する。

② 点検手法

各道路の特性等を踏まえ、道路管理者が適切に管理基準を設定し、目視又は機器を用いた手法等、道路管理者が設定する適切な手法により舗装の状態を把握する。

【補足】

損傷の進行が緩やかな道路等はストック量も多いため、対象道路を何年で一巡して点検とするような点検計画を立案することとした。何年で一巡するかについては、管内の管理実績等を踏まえ設定することが考えられる。管理実績等が不明な場合等は、「付録-3 大型車交通量毎の劣化特性の分析例」を参照するとよい。なお、点検間隔が長期となる場合は、巡視の機会等で得た情報により補完することが望ましい。

点検の実施に際しては、損傷の進行が早い道路等と同様に舗装の基本諸元を事前に整理しておくことが望ましい。

損傷の進行が緩やかな道路等以下に相当する道路の管理基準は、ひび割れ率20～40%、わだち掘れ量20～40mm等の事例があるとともに、各種指標を総合的に評価しているケースも存在するが、各道路管理者が道路の特性等に応じて適切に設定する。

点検手法は、目視又は機器を用いた手法等、適切な手法により舗装の状態を把握する。車上からの目視による方法や、路面性状測定車による方法、簡易な機器による方法等が考えられる。車上からの目視での点検が困難な場合は、降車して目視するなど、他の手法との併用を行う。

（２）健全性の診断

道路管理者が設定した管理基準に照らし、点検で得られる情報により、適切に診断する。

【補足】

診断による舗装状態の判定は、点検で得られた情報により、各道路管理者が設定している管理基準に照らし路盤の保護の観点で適切になされるものであるが、大きくは、以下の３区分に分類される。なお、判定にあたり、点検計画に基づく点検で得られる情報の他、巡視や住民通報に応じた対応等で得る情報も活用する。

区分		状態
I	健全	損傷レベル小：管理基準に照らし、劣化の程度が小さく、舗装表面が健全な状態である。
II	表層機能保持段階	損傷レベル中：管理基準に照らし、劣化の程度が中程度である。
III	修繕段階	損傷レベル大：管理基準に照らし、それを超過している又は早期の超過が予見される状態である。

なお、目視で判断する場合は、「付録－４ 損傷評価の例 【損傷の進行が緩やかな道路等のアスファルト舗装】」を参照するとよい。

(3) 措置

健全性の診断に基づき、舗装の修繕が効率的に実施されるよう、必要な措置を講ずる。

【補足】

点検・診断の結果に基づいて、道路管理者が総合的に検討し必要な措置を実施する。措置の例としては、損傷の進行が早い道路等の措置を参考にするとよい。なお、点検計画に基づく点検が一巡しない道路において、巡視や住民通報に応じた対応等で舗装の診断区分Ⅱ、Ⅲ相当の損傷という情報を把握し措置することも考えられる。

また、損傷の進行が緩やかな道路等の場合も、繰り返し修繕や補修を実施している区間や、当初の設計交通量よりも著しく交通量が増加し路盤の損傷が進行している区間が存在する場合がある。これらの区間においては、詳細調査を実施して表層等の状態及び路盤以下の状態を確認し、修繕後は表層がより長持ちすることが出来るような修繕設計、修繕工法を導入して路盤を含めた舗装打換え措置等の修繕を実施することが望ましい。

(4) 記録

点検、診断、措置の結果を記録し、当該舗装が供用されている期間はこれを保存する。

【補足】

点検、診断、措置の結果は、次回の修繕を検討する際に貴重な情報となるものであり、当該舗装が供用されている期間は保存することとした。

なお、記録する単位（延長等）は道路の特性等に応じて、道路管理者が適切に設定することとする。

(参考) メンテナンスサイクルのフロー

